

第三者割当増資の影と陰

(「石川銀行」の教訓)

私の住んでいる町の奥まった丘陵沿いに2つのゴルフ場がある。1つは、バブル期、母体会社が会員権増刷で集めた資金で派手な仕手戦を演じその名を知られた真里谷CC(現在は所有が変わり「きみさらずゴルフリンクス」という名になっている)、そしてもう1つは石川銀行不正融資の舞台となったカントリークラブ・ザ・ファーストである。

2つが2つとも問題のゴルフ場であったことに何の因果関係もないが、北陸金沢に本拠を置く銀行が千葉の片田舎まで触手を伸ばしていたという事実には正直驚いた。そして改めて、バブル期に私達の心性を浸食した陶酔的熱狂に思いを馳せないわけにはいかなかった。

その病的熱狂に侵された石川銀行は2001年末破綻した。そして先月、5つの地元金融機関に営業を譲渡し60年の歴史に幕を下ろした。だがこの銀行は、幕引き前、99年から翌年にかけて3度に渡って第三者割当増資を実施していた。結果、引受者は手にした真新しい株券が全て紙屑になるという悲痛を味わった。

今、この第三者割当増資をめぐる、増資に応じた375の法個人が石川銀行と旧経営陣を相手に訴訟を起こしている。そしてその中で、石川銀行が支店長や行員を総動員して取引先に向けた増資要請の手口が明らかにされた。

訴訟の帰趨は未だ分からないが、原告側が主張している勧誘手口(17種類の型)は参考になると思うのでその一部を記載してみる。

脅迫型	断ると今後の融資に影響する
利益誘導型	配当は利息より良い、貴社から贈答用商品を購入する、等
執拗型	何度も執拗に勧誘する
安全宣言型	国際国内基準達成、絶対安全、経営順調、不良債権なし、等
返還約束型	株はいずれ買戻すと約束
利益断定型	株を売れば必ず儲かる、等
権威宣言型	金融庁の許可を得ている
優待型	特別な人にだけ勧めている
出資金融型	出資に必要な資金は融資する
ノルマ達成型	ノルマを楯に愁訴する

この他に、顧客の了解を得ずに勝手に預金を振

替える「無断型」、知識や判断能力のない人に無理矢理勧める「無知・無思慮便乗型」等驚くべき手口も見られるが、こう詳しく見てみると、考え得るあらゆる手口が使われている。特殊な事例とはいえ、これが金融庁監督下の銀行を舞台に展開された増資という事実には重いものがある。

最近行われた大手銀行の増資を始め、ここ数年金融機関の資本増強を目的にした増資が頻繁に行われてきた。その多くは第三者割当増資という形の増資であった。

第三者とはその名の通り第三者である。この増資手法は、そのやり方によっては資本の質を著しく落とすことが指摘されている。銀行の第三者割当増資が全てそうだとはいえないが、極端な事例を解りやすく示せば次のようになる。

ここにA社とB社という2つの会社がある。A社が銀行から10億円を借入する。その資金でB社の10億円の第三者割当増資に応じる。10億円のお金はB社に移転する。今度はA社がB社を引受先とする第三者割当増資を10億円行う。A社からB社に移った10億円が又A社に戻る。その戻った資金でA社は銀行借入を返済する。この結果、どういことが起こるか。

A社もB社も資本金が10億円増える。しかし、増資で手に入れた(筈の)10億円は手元に残らない。10億円はそっくり出資金に振り替わるのだ。このようにお金を使わないで行う増資をダブルギアリングと呼ぶ。見せかけ増資だ。第三者割当増資は、このようにマイナスの影が漂う恐れのある増資手法である。

石川銀行が破綻直前に行った第三者割当増資はダブルギアリングではない。自己資本比率を上げて何とか破綻を免れようとした苦し紛れの増資だった。だから悪質な手口が横行した。しかし翻ってみて、最近行われた大手銀行の巨額増資は全く問題なかったらうか。株式市場が売りで答えたのは、大手銀行の増資の質に投資家が懸念を示したからに他ならない。

それだけでなく、銀行と生保、銀行と大企業相互で少なくない株式(資本)を持ち合っている。これを、企業防衛と相互繁栄を目的にした麗しき友誼関係の象徴と見ることに無理がある。より本質的に見れば資本の水増しだ。何となれば、株式持合いを煎じ詰めれば前述A社とB社の関係に収斂するからである。